

ドゥルーズ『差異と反復』におけるプラトン主義の転倒  
——追放された詩人の叛逆、《理念》<sup>イデア</sup>の再創造としての思考——

東京大学総合文化研究科 氏原賢人

はじめに

周知のとおり、現代フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは、「転倒したプラトン主義 (umgekehrten Platonismus)」を標榜したニーチェの影響下で「プラトン主義の転倒 (renversement du platonisme)」をこそ現代哲学の使命として挙げ<sup>(1)</sup>、自身もまたプラトンの著作を批判的に読み解くことをとおしてその思想を練り上げている。鈴木泉が説明するとおり、ドゥルーズは、プラトンに端を発する〈同一性〉の哲学に正面から対決を挑み<sup>(2)</sup>、いかなる同一性にも媒介されない純粋な〈差異〉の哲学を展開したのである。このようなドゥルーズ哲学については、近年活発な研究が行われている。しかし後に見るとおり、これらの研究によって、この思想の核心的な側面が十分に語られたとは言い難い。そこで本稿は、ドゥルーズの第一の主著『差異と反復』における「プラトン主義の転倒」に着目し、その中で展開されるドゥルーズ独自の思想にアプローチしたい。その際我々は、以下に述べる理由から、とりわけ「純粋思惟」と「イデア」の問題に焦点を絞り、ドゥルーズが提示した反プラトン主義的な《理念》<sup>イデア</sup>と、それとの関連のなかで再発明される「思考」について議論を行うことになるだろう。

はじめに、本稿の主題に関連する主要な参考研究をいくつか挙げ、その成果を見ておこう。まず前期ドゥルーズ哲学における「プラトン主義の転倒」については、すでに活発な研究が進められている。そのなかでも鹿野祐嗣の研究は、この問題を前期ドゥルーズ哲学の核となる「永遠回帰の一貫性」に結びつけて論じており、その点でとりわけ重要である<sup>(3)</sup>。ただし鹿野は「シミュラクル」や《理念》といった概念に議論を絞っており、そのため本稿が扱うことになる『差異と反復』の「思考」概念についてはまったくふれていない（また、鹿野がのちに発表した『意味の論理学』に関する包括的な研究においても、それが『意味の論理学』を主要な対象としている以上、我々の取り組む作業が十分に行われているとは言い難い<sup>(4)</sup>）。そして鹿野に限らず多くの研究者は、「プラトン主義の転倒」について語る際、もっぱら「シミュラクル」と《理念》のみを主題として取り上げてきた<sup>(5)</sup>。そのせいで、《理念》を対象とする「思考」をプラトン主義的な「純粋思惟」の「転倒」として理解する試みは、ほとんど行われてこなかったのである。ここに、我々が

敢えて「思考」の問題に取り組む理由のひとつがある。

とはいえ、もちろん『差異と反復』における「思考」それ自体についても、これまでに多くの研究が行われてきた。アンヌ・ソヴァニャルグや鈴木泉が「超越論的経験論」という主題のなかでこの概念を取り上げているほか<sup>(6)</sup>、ダヴィド・ラブジャードがその著作のなかで詳細に論じている<sup>(7)</sup>。そのうえラブジャードは、『差異と反復』の核心をなす「脱根拠化 (effondement)」の概念を取り上げ、これを「プラトン主義の転倒」と結びつけてさえいる点で、本稿の重要な先行研究をなしていると言えよう<sup>(8)</sup>。しかしラブジャードは、『差異と反復』の「思考」がこの「脱根拠化」の契機に重なるという極めて重要な点を指摘していないばかりか、この「脱根拠化」がドゥルーズの哲学体系のなかでいかなる契機として提示されているのか——『差異と反復』の哲学体系が、ラブジャードの言う「常軌を逸脱する運動」をいかにして説明しうるのか——について議論していない。ゆえに、我々が扱うべき「脱根拠化」としての「思考」の内実は、いまだに明らかになっていないのである<sup>(9)</sup>。これが、我々が「思考」の問題を扱うもうひとつの理由である。以上を踏まえて本稿は、「シミュラークル」や《理念》、さらには「脱根拠化」の概念をめぐるおこなわれてきたこれまでの研究を参照しつつ、(1) ドゥルーズがプラトンの「純粹思惟」を批判的に読み換え、これを自身の《<sup>イデア</sup>理念》との関係のなかで「脱根拠化」の契機として再構築したということを示し、(2) この「脱根拠化」という契機が『差異と反復』の哲学体系のなかでいかなる内実を有しているのかを明らかにしたい<sup>(10)</sup>。

## 1. 強度との遭遇、あるいは思考と芸術の紐帯

まず本節では、思考の開始を司る契機について議論しよう。プラトンは『国家』第七巻において、思考の活動を促す契機として、ある種の感性的な体験を挙げている。「感性に与えられるもののうちで、あるものは感性だけで十分に判別できるために、それをよく調べるために知性の活動を助けに呼ぶ必要はない。しかし場合によっては、感性は何ひとつ信頼できるものを与えないために、それを調べるために全面的に知性の活動を命じ促すものもある<sup>(11)</sup>」。このようにプラトンは、「感性だけで十分に判別できる」ものと「感性が何ひとつ信頼できるものを与えない」ものの区別について論じ、そのうえで後者こそが我々を「真実在 (οὐσία)」の探求へと駆り立てるとしている。このときプラトンは、感性に、探求の開始という特権を付与していると見てよいだろう。そしてソヴァニャルグの指摘するとおり、ドゥルーズは『差異と反復』

で、この二つの区別を「思考をしずませるもの」と「思考を強制するもの」の区別と言い換え、それらを出発点として独自の能力論を展開している<sup>(12)</sup>。まずドゥルーズによれば、思考は常にこの「思考を強制するもの」、すなわち「徴 (signe)」との感性的な遭遇から開始される<sup>(13)</sup>。さらにドゥルーズは遭遇の対象を「強度 (intensité)」とも呼んでおり、ここでいう「強度」とは同一的な量や質に還元されえない「純粋な差異」を意味している<sup>(14)</sup>。すなわちドゥルーズは、『国家』で論じられた感性の特権を参照しつつ、同一の事物として再認できない対象こそが我々を思考へと駆り立てると主張したのである。

このようにドゥルーズは、プラトン哲学から重要な示唆を受け取っている。しかし実際のところ、ドゥルーズはプラトン主義を踏襲する仕方で議論を進めたわけではない。というのも、当のプラトンは、思考を促す感性的な対象を「同時に反対の感覚」としてしか定義しておらず<sup>(15)</sup>、したがってそれをいかなる同一性も前提としない——それゆえに、同一的な二つの項を前提とする「対立」にも先行する——「純粋な差異」としての強度へと書き換えたドゥルーズは、まさしくプラトン主義の「転倒」を企てていたと言わなくてはならないのである。プラトンによれば、ある感性的な対象が思考を促すのは、それについて「感性が何ひとつ信頼できるものを与え」てくれないからである<sup>(16)</sup>。そうだとしたらプラトンは、そのような対象をあくまでも確定された二つの感覚の「対立」によって説明するのではなく、むしろいかなる同一的な感覚をも与えない「強度」として説明するべきだったのではないだろうか。このようにしてドゥルーズは、鹿野が指摘するとおり、プラトン主義の内部でプラトン主義を裏切り、いわば「転倒」させたのである<sup>(17)</sup>。

さて、ここでもう一度ドゥルーズの「思考を強制するもの」という表現に立ち返ろう。これは一見すると、『国家』で言われている「感性が何ひとつ信頼できるものを与えない」ものという表現の忠実な翻訳に見えるが、そこではすでにプラトン主義に対する叛逆が企てられていると言わなくてはならない。というのも、そこでドゥルーズが用いている「強制 (力) (force)」という語には、プラトン主義が打ち立て、さらに哲学史のなかで保持されてきた思考についての道徳的な先入見、すなわち「思考のイメージ」に対するラディカルな批判が込められているからである。ドゥルーズが指摘する通り、プラトン以来「哲学」という営みは「知への愛」を、言い換えれば思考への自発的な意志を前提としてきた<sup>(18)</sup>。すなわちプラトンは、思考における感性的な端緒としての「遭遇」を発見しつつも、最終的にはそれによってではなく、自ら思考へと向かう良き意志によって思考の開始を説明したのである。一方でドゥルーズは、ラブジャードの言葉を借りれば、思考と感性の「無媒介的

な関係（*rapport immédiat*）」を主張して譲らない<sup>(19)</sup>。すなわちドゥルーズの思考は常に感性とともにあり、したがって感性的な遭遇の対象を必要とするのである。そうであるならこの思考は、感性を刺激し揺さぶる芸術との間に分かちがたい同盟を結ぶことにならないだろうか。ここで我々は、ドゥルーズ哲学と芸術の関係について、プラトンの詩人追放論を念頭に置きつつ考えてみたい。

『国家』のいくつかの箇所ではプラトンは、自身が建設する理想国家から詩人を追放することを宣言する。それはまずもって、画家が——イデア界にある椅子、そして職人が制作した椅子に次ぐ——第三の椅子、すなわち作品としての椅子を制作する者であるように、詩人があくまでも徳や神について知る第三の者にすぎないからであり、要するに詩人が（モデルたるイデアの）コピーをさらに複製するという悪しき風習を有しているからにほかならない<sup>(20)</sup>。さて、ドゥルーズはこのようなプラトンの見立てに対してニーチェの思想を参照しつつ応答し、芸術を「偽なるものの最高度の力」として定義している<sup>(21)</sup>。すなわちドゥルーズは、イデアとそのコピーとの二項関係から逸脱するとしてプラトンが拒否した「コピーのコピー」たる芸術を、まさしくその理由においてむしろ高く評価し、プラトンが建設した道徳的な国家を揺るがすための叛逆者へと仕立て上げたのである<sup>(22)</sup>。またドゥルーズは、ニーチェが芸術を「力の意志の刺激剤」として定義し、能動的な生における芸術の意義を強調していたことにも言及している<sup>(23)</sup>。さらに『差異と反復』において「強度」が「力の意志」とも呼ばれ、さらに思考を促す「強度との遭遇」が別の箇所では二つの強度間で起こる「連繫（*communication*）」として説明されている<sup>(24)</sup>ことを考慮するならば、ドゥルーズがニーチェの影響下で、思考と芸術の深い紐帯を構想していたことが分かるだろう。かくしてドゥルーズは、まさしくプラトンが追放した詩人とともにプラトンの理想国家への叛逆を企て、プラトンが構想した思考をラディカルに批判したうえで、プラトンとは全く別の仕方でも新たに思考を描き直したのである。

また、このような思考者による詩人との連帯は、ドゥルーズ本人のものでさえある。というのもドゥルーズは、「思考のイメージ」への批判を準備するにあたって、実際にプルーストやアルトーなどの「詩人」から多くの示唆を受け取っているのである。まず『プルーストとシーニュ』では、抽象的な真理を求める「哲学のイメージ」が批判され、他方で徴との遭遇によって思考の開始を説明する「思考のイメージ」が高く評価される<sup>(25)</sup>。そして『差異と反復』では、アルトーが抱える「思考に成功すること」への希求のなかに、すなわち自身の苦悩を思考へと昇華させる闘いのなかに、思考を人間的本性

とする「思考のイメージ」の破綻と、もはや人間のものではないような「《イメージ》なき思考 (pensée sans Image)」が到来する希望を見て取っている<sup>(26)</sup>。こう言ってよければドゥルーズは、いわば感性の着火剤としての芸術や、自身が生きた体験の只中で言葉を紡ぎだす詩人たちとのせめぎ合いのなかでこそ、思考の再発明を成し遂げたのである。

## 2. プラトンの「イデア」とドゥルーズの〈<sup>イデア</sup>理念〉

以下で我々は、『差異と反復』において提示される思考がいかなる契機であるのかを問うことになる。その際にも我々は、プラトン主義を横断しつつドゥルーズの思想へと赴くことになる。

周知の通りプラトンは、「純粹思惟 (νοῦς, νόησις)」を、真實在たる「イデア (ἰδέα)」の洞察として理解している。そしてそれ以来、このような思考とイデアとの結び付きは、イデアを「観念」と解したデカルトのコギトや「理念」に経験的な悟性認識を統制する役割を与えたカント、さらには「理念」を「思考の諸微分」として定義したマイモンに至るまで、哲学史のなかで長く維持されている。そしてドゥルーズはといえば、彼もまたこの系譜に属しており、まさしく《理念》との関わりのなかで思考を構想している<sup>(27)</sup>。いわばドゥルーズは、プラトンに端を発するイデア＝理念の概念史を引き受けつつそれを「転倒」することによって、「思考」を独自の哲学概念として仕立て上げたのである。そこで我々は、プラトンのイデアについての議論を経由しつつ、まずはドゥルーズの《理念》について概観しよう。

周知の通り、プラトンのイデアとは「……とは何か？ (qu'est-ce que?)」という、いわば事物の「本質」をめぐる問いに対応する概念である<sup>(28)</sup>。まずプラトンは、当時「家」や「屋敷」を意味する日常語であった「ウーシア (οὐσία)」という語を、「存在」を意味する哲学概念へと仕立て上げた。次いで、フランス語では一般に *essence* と訳されるこの概念によってプラトンは、事物の「本質」をめぐる問いを開始したのである。そしてプラトンは、事物の〈形〉を規定する超自然的な原理としての「イデア」を構想し、ドゥルーズの言葉を借りれば、このイデアを「事象の (réelle) 同一性の形式」として定義する<sup>(29)</sup>。これによってプラトンは、存在を「生成する (φύεσθαι)」ものと解していたソクラテス以前の哲学者たちと訣別することになるのである<sup>(30)</sup>。

このように「本質」としてのイデアを説くプラトン主義を、ドゥルーズはまたしても「転倒」させる。すなわちドゥルーズは、プラトンの本質をめぐる問いが「いわゆる困難な対話、すなわちその問いの形式そのものによって

矛盾の中に投げ込まれ、ニヒリズムへと陥ってしまうような対話しか活気づけない<sup>(31)</sup>」として批判している。そして『差異と反復』において《理念》<sup>イデア</sup>は、プラトンのイデアが有していた問題や問いとの関係を保ちつつ「問題」の審級として語られ——そこにはまた、「諸々の探求すなわち問いかけを方向付け包含する統一的なシステムの場」としての「理念 (Idee)」の問題的性質を強調したカントへの参照も込められている<sup>(32)</sup>——ながらも、むしろ「非本質的なもの (l'inessentiel)」の領域として定義され、「定理的な本質 (essence théorématique)」のそばを離れて、「諸々の出来事や変状、そして偶発事 (événements, affections, accidents)」の領域へと変化することとなる<sup>(33)</sup>。だからこそドゥルーズの《理念》は、「……とは何か？」という問いにではなく、「どのくらい？ (combien ?)」、「どのように？ (comment?)」、「どのような場合に？ (dans quel cas ?)」といったいわば経験論的にして多元論的な問いにこそ対応するようになるのである<sup>(34)</sup>。そして、のちに明らかになるとおり、このような問いによって《理念》は、これから起こる出来事、言い換えれば潜在的な出来事としての「理念的な出来事 (événements idéels)」<sup>イデアエール</sup>を決定する<sup>(35)</sup>。

さらにドゥルーズは、他との関係においてのみ言われる諸々の「美しいもの」ではなく「美」そのものを規定する、いわば絶対的な同一性としてのイデアを転倒させる。すなわちドゥルーズは《理念》<sup>イデア</sup>を、いかなる同一性や〈一〉も前提としない「それ自体における差異」によって構成される〈多である限りでの多様体〉として構想したのである。以下でこの点について議論しよう。まず、鈴木が指摘するとおり<sup>(36)</sup>、ドゥルーズは《理念》を構想するにあたって微分法<sup>イデアエール</sup>の思想を活用し、《理念》を「相互的に規定可能な発生的要素間の、理想的な連結 (liaisons idéales)、すなわち差異的=微分的な関係 (rapports différentiels) のシステム<sup>(37)</sup>」として定義する。すなわちドゥルーズの《理念》とは、(1) それ自体では未規定な——すなわち、いかなる同一的な項をも成さない—— $dx$  と  $dy$  が、(2) 互いとの差異的=微分的な関係によってはじめて規定可能なもの—— $dy/dx$  の相互規定——となり、(3) さらにこれらの関係に応じてそれぞれの項が完足的に規定されるようになる—— $dy/dx$  の値が確定される——ことで構成されるのである。そしてこれらの項には、すでにふれた「理念的な出来事」の数々が対応している。すなわち、先の引用で《理念》を構成する諸要素が「発生的」とされているのは、《理念》が発生の原理によって現働化する潜在的な出来事たちの星座を成しているからにほかならない。要するにドゥルーズの《理念》とは、あらゆる同一性に先行する「それ自体における差異」によって構成され、「どのくらい？」や「どのよ

うに?」、そして「どのような場合に?」などの「非本質的なもの」をめぐる問いに応答する無数の出来事がひしめきあう、あらゆる意味で反プラトン主義的な審級なのである。

さて、このような《理念》が、いわば経験的な世界のありかたを条件づける超越論的な審級のひとつを成していることは、今や明らかであろう。アルノー・ブアニシュが指摘するとおり、『差異と反復』は経験的なこの世界の成立を担う条件を問う超越論哲学を展開している<sup>(38)</sup>。とはいえドゥルーズが、自身の哲学によってあくまでもこの世界の外的な条件づけを行うにとどまったカントに抗し、「内的な発生」の条件づけをこそ目指したということを忘れてはならない<sup>(39)</sup>。すなわち《理念》とは、あらゆる経験的な事物を内的に規定する審級であって、ゆえにドゥルーズ哲学は、「あらゆる事物は二重であり、しかもその二つの半身は似ていない。一方は潜在的〔理念的〕なイメージであり、他方は現働的〔経験的〕なイメージである。すなわち、不等で非対称な半身である<sup>(40)</sup>」と主張することになるのである。

### 3. 思考、あるいは賽の一振り

前節では、ドゥルーズの思考がそれへと方向づけられている《理念》を概観することで、本稿の主題である「思考」を扱うための準備を整えた。よって本節ではついに思考の問題へと踏み入ることとなるが、その際にも我々は本稿の企図にしたがい、折に触れてプラトン主義を参照することになるだろう。

すでに述べたとおりドゥルーズは、『差異と反復』において、思考についての道徳的な先入見である「思考のイメージ」への批判のなかで来たるべき新たな思考を構想した。ここで我々は、この「イメージ」を成す諸公準のひとつである「再認というモデル」について見ていこう。ドゥルーズによれば、従来の哲学はつねに「再認」というモデルに従って思考を構想してきた。たしかに、蜜蠟の比喩によって認識について語るデカルトや、『純粹理性批判』第一版において三段階の綜合——構想力における把捉の綜合、構想力における再生の綜合、そして悟性による再認の綜合——を論じたカントのみならず、プラトンのイデア論もまた「再認」のモデルに則っていると言うことができるだろう。というのも、プラトンが語るウーシアの探求においては、不死なる魂が永遠不変なるイデアへと導かれ、そして魂がかつて目にしながらも忘却していた「イデア」を「想起」としてされており、そのためプラトンにおいては、ラブジャードが指摘するとおり時間是一種の「円環」をなし<sup>(41)</sup>、さ

らにアイデアの洞察は純粹思惟によるアイデアの再発見、魂によるかつていた場所への回帰にほかならないからである。このような魂の運動は、ドゥルーズが主体と対象の同一性を前提として定立されると主張する再認のモデルの範例を成していると見ることができる。

かくして再認のモデルは、プラトンのアイデア論以来長く哲学における「思考」のモデルを成してきた。そしてドゥルーズは、このような再認は単に対象に向けられるだけでなく、むしろ既成の諸価値に対してもなされてきたとしている<sup>(42)</sup>。すなわち再認は、我々の日常的な経験を規定しているのみならず、教会や国家、そしてある時代において通用している諸々の価値にさえ向けられるというのである。そうだとしたら再認としての思考は、「あらゆる価値の価値転換」というニーチェ - ドゥルーズ的な企てをこの上なく深く裏切るものとなるだろう。だからこそドゥルーズは、この「再認」というモデルが深く刻み込まれている諸々の哲学に対して、苛烈な批判を行うことになるのである。

さて、以下で見るドゥルーズの思考は、このような再認のモデルと訣別し、このモデルが前提とする主体と対象の同一性を、さらには主体 - 対象という対立それ自体を棄却することとなる。まずドゥルーズは、『差異と反復』とほぼ同時期に書かれた「何をもって構造主義と認めるか」において、思考を「賽の一振りを放つこと」と定義している<sup>(43)</sup>。そして『差異と反復』によれば、「賽の一振りとは、諸問題に関する計算を、そして差異的＝微分的な諸要素の規定を〔……〕を操作する<sup>(44)</sup>」ことである。すなわち思考とは、諸々の問題すなわち《理念》を、あるいはそれを構成する差異的＝微分的な諸要素を「操作」する賽の一振りを放つことなのだ<sup>(45)</sup>。そのとき思考は、《理念》の「〔差異的＝微分的な〕関係を変化させ、諸々の特異性を再配分する<sup>(46)</sup>」ことによって根拠としての《理念》を崩壊させ、再創造することだろう。だからこそドゥルーズは、このような思考を「普遍的な脱根拠化」の運動として定義し<sup>(47)</sup>、さらにこのような思考こそが《理念》の「根源的始点」をなすと主張するのである<sup>(48)</sup>。また、ドゥルーズはこのような思考を「根拠としての〈コギト〉」に対立させつつ、「溶解したコギトの亀裂の入った〈私〉」に結びつけている<sup>(49)</sup>。それはまさしく脱根拠化としての思考が、デカルトのコギトのように思考者たる〈私〉の同一性を確保する役目を果たすことを放棄し（「溶解したコギト (cogito dissous)」）、反対にこの同一性を排除する契機として覚醒したからにほかならない（「亀裂の入った〈私〉 (Je fêlé)」）。すなわちドゥルーズは、プラトンが不死なる魂による永遠不変のアイデアの「再発見」として提示した思考を、自我の同一性を排除しつつ《理念》の脱根拠化を企て

る反抗的にして創造的な契機へと書き換えたのである。そして、ドゥルーズにおいて《理念》がこの世界の内的な発生の条件を担う審級であることを思い起こせば、この《理念》を再創造する思考の運動が、局所的な仕方ではあれ、この世界を変革する運動として定義されうるということが分かる。例えば鹿野が指摘するとおり、社会的な領野における「賽の一振り」としての思考は、現実の社会革命のエレメントをなす契機にほかならないのだ<sup>(50)</sup>。かくしてドゥルーズの思考は、西洋哲学の起源をなすプラトン主義を幾度となく転倒し、終わることのない「あらゆる価値の価値転換（*Versuch einer Umwertung aller Werte*）」を企てるのである。

## 注

(1) Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968, p. 82. 以下 *DR* と略す。なお、本研究で引用する外国語文献に関しては、邦訳のあるものはそれを参照しつつ筆者が訳出した。また、引用中の強調は、特に断っていない場合は原文に依拠している。

(2) 鈴木泉「ドゥルーズ」、『哲学の歴史』、第一二巻、鷲田清一編、二〇〇八年、六一四 - 六一五頁。

(3) 鹿野祐嗣「ドゥルーズによるプラトニズムの反時代的な転倒」、『表象・メディア研究（第3号）』、早稲田表象・メディア論学会、二〇一三年。さらに鹿野は、「詩人」と「芸術」の問題をめぐるドゥルーズの理論にも若干ではあるがふれている。このように、先行研究によってふれられながらもいまだに十分な議論がなされていない問題に取り組むこともまた、本稿の課題をなしている。

(4) 鹿野祐嗣『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究』、岩波書店、二〇二〇年。

(5) 上記を除いた関連する主な先行研究として、Jean-Claude Dumoncel, « Deleuze, Platon et les poètes », in *Poétique*, N° 59, septembre 1984, Gregory Flaxman, Daniel W. Smith, « Platonisme — The Concept of the Simulacrum: Deleuze and the Overturning of Platonisme », in *Essays on Deleuze*, Edinburgh University Press, 2012, 田中敏彦「ドゥルーズと哲学史」、渡邊二郎監修・哲学史研究会編『西洋哲学史の再構築に向けて』、昭和堂、二〇〇〇年を挙げておく。

(6) Anne Sauvagnargues, *Deleuze. L'empirisme transcendantal*, PUF, 2010. 鈴木泉「現代フランスにおける超越論的経験（論）」、『現代の哲学：西

洋哲学史二六〇〇年の視野より』哲学史研究会編、昭和堂、二〇〇五年。

(7) David Lapoujade, *Deleuze. Les mouvements aberrants*, Minuit, 2014.

(8) Lapoujade, *op. cit.*, p. 48-49. なお「脱根拠化 (effondement)」とは、「崩壊 (effondrement)」と「根拠 (fondement)」から作られたドゥルーズによる造語である。

(9) ただし「脱根拠化」をエレメントとする「永遠回帰の一貫性」については、鹿野、前掲書のほか、飯野雅敏「ドゥルーズ『差異と反復』におけるライブニッツ哲学の活用」、『年報地域文化研究 (第 22 号)』、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、二〇一九年によって、近年徐々にその内実が明らかになってきている。本稿の議論は、これらの重要な先行研究の示唆に依っている。

(10) とはいえ本稿は、「芸術」についての議論を行うなかで「シミュラクル」の問題に接近することとなるだろう。

(11) Platon, *Politeia, Platonis opera*, Oxford Classical Texts, vol. 4, ed. J. Burnet, Oxford university press, 1902, 523A-B.

(12) *DR*, 181. Sauvagnargues, *op. cit.*, p. 77.

(13) *DR*, 182, 187.

(14) *DR*, 187. たしかにドゥルーズは、「強度」概念を「強度量 (quantité intensive)」と言い換えることもある。しかしモンテベロも指摘する通り、このような「強度 (量)」を伝統的な「内包量」概念や熱力学の「示強変数」と混同してはならない (Cf. Pierre Montebello, *Deleuze. La passion de la pensée*, Vrin, 2008, pp. 152-153)。というのも、強度は経験的な量や質を創造する超越論的な審級であり、当の強度は確定された量や質には還元されえないからである (Cf. *DR*, 288)。

(15) Cf. Platon, *Politeia*, 523B-C ; *DR*, 184.

(16) Platon, *Politeia*, 523B.

(17) 鹿野、前掲論文、五頁。

(18) *DR*, 170. ; Deleuze, *Proust et les signes*, PUF, 1964, p. 24. 以下 *PS* と略す。

(19) Lapoujade, *op. cit.*, p. 96. また、山森裕毅は「感性」、「記憶」、「思考」という三つの能力を「超越論的经验論」の基本的な機制として挙げている (山森裕毅『ジル・ドゥルーズの哲学』、人文書院、二〇一三年、九頁、一六八 - 一七八頁)。しかし、ドゥルーズが (1) 未だ発見されていないものをも含むあらゆる能力が「超越的行使」へと高められうるとし、(2) そもそも

この議論の主眼は「諸能力に関する〔体系的な〕理論」を確立することではないとしている以上、この理論をいくつかの基本的な能力からなる体系として理解することは正確ではない（*DR*, 186-187. おそらく山森は、ドゥルーズがプラトンの真実在の探求を読み換えることで自身の思想を導入している箇所と、全面的に自身の思想を展開している箇所とを取り違えているのではないだろうか？）。要するに「超越論的経験論」の主眼の一つは、諸能力を新たに条件づけることで絶えずこの能力を（再）発明するような「（能力の）超越的行使」を提示することこそあり、既成の諸能力によって整合的な機制を構築することにはないのである。なお「諸能力の超越的行使」については、氏原賢人「ドゥルーズ『差異と反復』における思考の問題」、『*In-vention*（第8号）』、早稲田大学文学研究科表象・メディア論コース、二〇二〇年を参照。

(20) Platon, *Politeia*, 595a-607b.

(21) Deleuze, *Nietzsche et la philosophie*, PUF, 1962, p. 117. 以下 *NP* と略す。

(22) また、このような「芸術」のあり方はドゥルーズにおける「シミュラクル」のそれを指し示している。鹿野、前掲論文が指摘するとおり、『*差異と反復*』における「芸術」は「プラトン主義の転倒」の核心をなす「シミュラクル」と深い紐帯を築いているのである（Cf, *DR*, 375）。

(23) *NP*, 116-117.

(24) Cf. *DR*, 155-156.

(25) *PS*, 24-25, 115.

(26) *DR*, 191, 258.

(27) ただし厳密に言えば、『*差異と反復*』において《理念》は思考という単一の能力に関わるのではなく、むしろ強度との遭遇をきっかけとしてあらゆる能力を駆け巡るとされている（*DR*, 249-250）。

(28) プラトンのイデア論については以下の文献を参照した。Anthony Preus, *Historical Dictionary of Ancient Greek Philosophy*, 2<sup>nd</sup> edition, Rowman & Littlefield Pub, 2015.

(29) *DR*, 185.

(30) 例えばプラトンは、『*ソピステス*』248A や『*ティマイオス*』37C-38A で「生成（γένεσις）」と「存在（όν）」を対立させて論じている。「諸君は〈生成〉というものと、他方〈実在〉とを区別して、別々のものとして語っているはずだね〔……〕そして我々は身体により、感覚を通じて、〈生成〉と関わりをもち、他方、魂により、思惟を通じて、真の〈実在〉と関わりをもつのだ、と。その〈実在〉はつねに恒常不変のあり方を保つのであるが、他方〈生

成)は刻々と流転するものである、と。(Platon, *Sophistes, Platonis opera*, Oxford Classical Texts, vol. 1, ed. J. Burnet, Oxford university press, 1900, 248A)」

(31) *DR*, 243.

(32) *DR*, 219.

(33) *DR*, 242-243.

(34) *DR*, 243-244.

(35) *DR*, 212.

(36) 鈴木泉「潜在性の存在論」、『情況』第三期四卷三号、二〇〇三年、一九三頁。

(37) *DR*, 225.

(38) Arnaud Bouaniche, *Gilles Deleuze, une introduction*, La Découverte, 2017, p. 124.

(39) *DR*, 200.

(40) *DR*, 270-271.

(41) Lapoujade, *op. cit.*, p. 47.

(42) Cf. *DR*, 176-179.

(43) Cf. Deleuze, « A quoi reconnaît-on le structuralisme? », in *L'île déserte et autres textes*, Minuit, 2002, p. 245.

(44) *DR*, 256.

(45) このような「賽の一振り」をドゥルーズによるライブニッツの「可能世界論」の創造的な読みかえという文脈で扱った研究として、飯野、前掲論文を挙げておく。

(46) Cf. Deleuze, « A quoi reconnaît-on le structuralisme? », in *op. cit.*, p. 269.

(47) *DR*, 251.

(48) *Ibid.*

(49) *Ibid.*

(50) Cf. 鹿野、前掲書、八九頁。また、この点を踏まえると、例えば國分功一郎が行ったように、ドゥルーズの思考を「行為」とは別の次元に位置づける読解は誤りであると言わなくてはならない (Cf. 國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』、岩波現代全書、二〇一三年、一〇六頁)。ドゥルーズの思考概念は、思弁と行為という (あるいは理論と実践という) 二項対立を突き崩すのだ (*DR*, 269)。なお、ここでの社会革命とは、社会学的な《理念》としての生産関係と所有関係を変化させることで現行の社会体制を変革するこ

とをいう (Cf. *DR*, 240)。

## 文献表

- Anthony Preus, *Historical Dictionary of Ancient Greek Philosophy*, 2<sup>nd</sup> edition, Rowman & Littlefield Pub, 2015.
- Arnaud Bouaniche, *Gilles Deleuze, une introduction*, La Découverte, 2017.
- David Lapoujade, *Deleuze. Les mouvements aberrants*, Minuit, 2014.
- François Zourabichvili, *Une philosophie de l'événement*, Paris, PUF, 1994.
- Gilles Deleuze, *Nietzsche et la philosophie*, PUF, 1962.
- Gilles Deleuze, *Proust et les signes*, PUF, 1964.
- Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968.
- Gilles Deleuze, « A quoi reconnaît-on le structuralisme? » in *L'île déserte et autres textes. Textes et entretiens 1953-1974*, éd. préparé par David Lapoujade, Minuit, 2002.
- Gregory Flaxman, D. W. Smith, « Platonisme — The Concept of the Simulacrum: Deleuze and the Overturning of Platonisme », in *Essays on Deleuze*, Edinburgh University Press, 2012.
- J-C Dumoncel, « Deleuze, Platon et les poètes », in *Poétique*, N° 59, septembre 1984.
- Pierre Montebello, *Deleuze. La passion de la pensée*, Vrin, 2008.
- Platon, *Politeia, Platonis opera*, Oxford Classical Texts, vol. 4, ed. J. Burnet, Oxford university press, 1902.
- Platon, *Sophistes, Platonis opera*, Oxford Classical Texts, vol. 1, ed. J. Burnet, Oxford university press, 1900.
- Platon, *Timaios, Platonis opera*, Oxford Classical Texts, vol. 4, ed. J. Burnet, Oxford university press, 1902.
- 飯野雅敏「ドゥルーズ『差異と反復』におけるライブニッツ哲学の活用——〈理念〉・可能世界・副次的言説——」、『年報地域文化研究(第22号)』、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、二〇一九年。
- 氏原賢人「ドゥルーズ『差異と反復』における思考の問題——脱根拠化としての思考とそのプロセスについて——」、『In-vention(第8号)』、早稲田大学文学研究科表象・メディア論コース、二〇二〇年。
- 國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』、岩波現代全書、二〇一三年。
- 鹿野祐嗣「ドゥルーズによるプラトニズムの反時代的な転倒——シミュラーク

- ルの叛乱、出来事としての *Idée*——』、『表象・メディア研究（第3号）』、早稲田表象・メディア論学会、二〇一三年。
- 鹿野祐嗣『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究：出来事、運命愛、そして永久革命』、岩波書店、二〇二〇年。
- 鈴木泉「潜在性の存在論——前期ドゥルーズ哲学の射程」、『情況（第三期四卷三号）』、二〇〇三年。
- 鈴木泉「現代フランスにおける超越論的経験（論）」、『現代の哲学：西洋哲学史二六〇〇年の視野より』哲学史研究会編、昭和堂、二〇〇五年。
- 鈴木泉「ドゥルーズ」、『哲学の歴史（）』、第一二巻、鷺田清一編、二〇〇八年。
- 田中敏彦「ドゥルーズと哲学史」、渡邊二郎監修・哲学史研究会編『西洋哲学史の再構築に向けて』、昭和堂、二〇〇〇年。
- 山森裕毅『ジル・ドゥルーズの哲学：超越論的経験論の生成と構造』、人文書院、二〇一三年。